

## 目加田誠先生と中国文学 5

### — 『聊齋志異』 5 —

清代の怪異小説『聊齋志異』をご紹介します。目加田誠先生が高校三年生だった時のこと、柴田天馬氏訳の『聊齋志異』がとても気に入って、大学で中国文学（当時は支那文学と言っていた）を選ぶきっかけとなったとも言えると書かれているのが取り上げる理由です。

今までに「西湖主」・「八大王」・「画壁」・「嬌娜（きょうだ）」・「勞山道士」・「狐嫁女（こかじょ）」・「王蘭（おうらん）」をご紹介します。今回は「耿十八（こうじゅうはち）」と「阿宝（あほう）」を取り上げます。

どちらも夫婦の話ですが、対照的な内容です。ぜひお読み下さい。柴田天馬氏訳の創元社版では第8巻と第7巻に、岩波文庫版では上巻の第25話と第29話にそれぞれ「冥土行きの車」・「癡（こけ）の一念」という副題がついて採録されています。

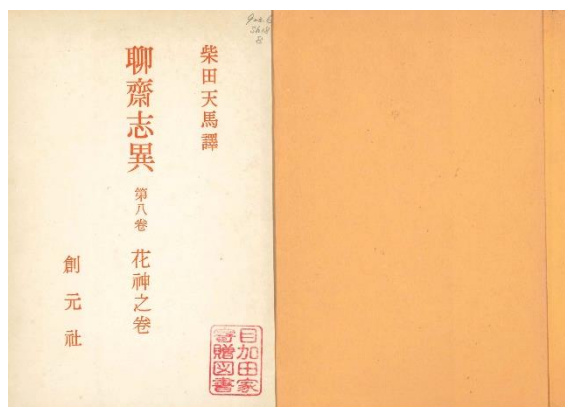
柴田天馬訳

『聊齋志異』

第八巻とびら

株式会社創元社

昭和27年



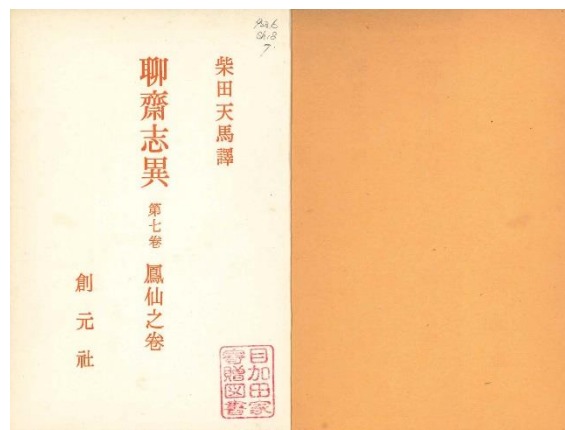
柴田天馬訳

『聊齋志異』

第七巻とびら

株式会社創元社

昭和27年



### 【歌十八（こうじゅうはち）】

新城県（山東省）の歌十八は病気にかかっていたが、悪化して  
いよいよ最後だと覚悟を決めた時に妻を枕元に呼んで言いました。  
「これでお別れだ。私が死んだら再婚しようが、独身を通そうがかっ  
てだが、本心を聞かせてほしい。」と言ったところ、妻は「うちは貧  
しくてやっとの生活でしたから、独身では無理です。」と答えました。  
それを聞いた歌十八は妻の腕を取り、恨めしげに「人でなし。」と一  
言言ったかと思うと、息絶えてしまいました。

歌十八は自分が死んだことがわからずにいて、外に出てみました。  
すると、小さな車が 15、16 両並んでいて、名前が書かれていて、そ  
れぞれに 10 人ずつ乗り込んでいました。歌十八は自分の名前が書か  
れている車に乗りました。車はぎいぎいとやかましい音をたてて進み  
ました。まわりの人の話を聞いているうちに自分が死んで亡者になっ  
たことを知りました。しばらく進むと高さが 2 メートルほどの台があ  
り、頭に袋をかぶせられたり、手かせ足かせをされた男達が泣き泣き  
上り下りをしていました。台は望郷台といい、歌十八が上って下を見  
ると自分の家が見えました。そばに立っていた人に老いた母のことが  
心配だと言うと、いっしょに飛び降りようと言います。思い切って飛  
び降りると、無事この世の地面に下りることができました。

家に帰ると、まだ自分の体が置いてあり、それを見たとたん夢から  
さめたように息を吹き返しました。家人はびっくりしましたが、歌十  
八の話を聞いて納得しました。

数日すると、体調も回復しましたが、それ以後妻を近づけることは  
ありませんでした。

※夫婦間でも大事なことは言わないほうがいいかも。でも、次の阿宝  
は少し違います。

癡（こけ）は「おろか」という意味です。

## 【(阿宝 (あほう))】

孫子楚 (そんしそ) は学問が得意な人として知られていましたが、足に障がいを持ち、まじめ過ぎて口べたでよく人にかつがれました。そして「癡の孫 (こけのそん)」というあだ名をつけられました。

同じ県に大金持ちがいて、その娘は阿宝という名前の絶世の美女でした。しかし、なかなか父親の眼鏡にかなう婿は現われませんでした。

孫は妻に死なれて一人暮らしでした。ある人がたわむれに、阿宝に後妻の申し入れをしてみたかどうかと勧めてみたところ、孫は真に受けて申し入れをしました。父親は孫が貧乏だったので話にならないと思いましたし、阿宝は孫に無理な依頼をしてからかいました。

清明節の日は女性達が着飾って墓参りをする日なので、孫たちは阿宝を見ようと出かけました。実際に見ると、阿宝は世にふたりとはなほの美しさで、孫はその場にたちすくんでしまい、みんなに手を引かれて帰りました。

孫は家で寝こんでしまいますが、不思議なことに本人は阿宝についていき、彼女の家に入り彼女と仲良く暮らします。魂だけが抜け出てしまったのです。孫の家のもは阿宝の家に行って魂を呼び戻し、孫は元気になりますが、阿宝に会いたくてたまりません。そのうち、浴仏節に阿宝が寺参りをするというので、道で待つと、阿宝は車の中から孫を見つけ、小間使いをよこして名前を聞きます。孫は「孫子楚です。」と答えます。孫は家に帰り、また寝こんでしまいました。

孫は夢うつつで過ごしていましたが、飼っていたオウムが死にました。自分がオウムになれば阿宝の所に飛んでいけるのにと考えていたら、のり移ってしまい、矢のように阿宝の所に飛んでいきました。阿宝はオウムが飛んできたので喜んで鎖でつなぎました。孫は自分であると叫んだので、驚いた阿宝は鎖を解いてやり、そして、「あなたの私のことを思う気持ちはよくわかりますが、鳥と人では夫婦になれないではないですか。」と言うと、オウムは「いえ、こうしておそばにいられるだけで幸せです。」と言います。そしてオウムは阿宝のそばにつきっきりです。阿宝は孫の家の様子を探らせると、孫は息もせず寝たままでした。このため、阿宝は孫に「あなたが人間に戻るなら誓ってお嫁にさせていただきます。」と言うと、オウムは始めは信じられないというふうでしたが、阿宝が念を押すと、阿宝の靴をくわえて飛び立ち

ました。

阿宝が孫の家にはばあやを行かせると、孫はすでに蘇生していて、阿宝の言葉を忘れませんよと言いました。阿宝はそれを聞いて喜びますが、母親は孫が貧しいことから結婚に反対します。それでも阿宝の意思は強く、親も最後には聞き入れて、阿宝は孫の家に嫁ぎました。

孫は喜びますが、勉強するばかりです。しかし、阿宝は蓄財にたけていたので、孫の家は豊かになりました。ところが、孫が突然糖尿病で死んでしまいました。阿宝は激しく泣き食事もとらなくなり、とうとう首をくくってしまいました。小間使いがそれに気がつき、手当てをしたので一旦蘇生をしましたが、食事はとりませんでした。

孫が死んで3日目になり、埋葬しようとした時になんと孫が生き返りました。そして「えんま大王に会ったら、生前誠実であったので、役人を命じられた。その時取次ぎが孫の妻がまもなくこちらに到着しますと伝えた。大王は、そなたの妻の節義に免じてもうしばらく生かしてやろうと言って馬に引かせて送り返してくれた。」というのです。

こうして、夫婦そろって元気になりました。この年は役人の登用試験のある年でした。仲間達がかからかって、難しい問題を作って孫に示しました。孫は夜も寝ずに猛勉強をして模範解答を作り上げました。仲間達は笑っていましたが、なんと本番の試験で同じ問題が出されたのです。おかげで孫は主席で合格しました。上級試験にも合格し、役人に取り立てられました。天子（皇帝）が孫の変わった経歴を聞いてお呼びになりました。孫がつぶさに申し上げると、天子は大いに喜ばれ、さらに阿宝も呼び出して恩賞を与えました。

えんま大王も夫婦愛に打たれたのですね。